

# はじめに

筆者が通っていた小学校には「旅行クラブ」というクラブがあった。といっても小学校のことであるから、実際に旅行をするクラブではなく、旅行の計画を立てるクラブである。日本各地のことを調べ、時刻表片手に、いつどこにどうやって行って何をするかを考えて楽しむのである。今でもそのクラブが続いているとしたら、きっと国内旅行だけでなく海外旅行も視野に入っていることだろう。飛行機で仙台から成田経由でパリに行き、美術館を巡ってから、電車でベルサイユに移動して、宮殿を見学し庭園を散策する。新幹線で東京に出て、羽田から直行便でボストンに飛び、メジャーリーグ・ベースボールの試合（もちろん、レッドソックス vs. ヤンキース）を観戦する。あるいは、船でガラパゴス諸島を巡りダーウィンの興奮を追体験する、などなど、考えただけでわくわくする計画を立てているかもしれない。本書は、言葉の世界の旅行クラブに皆さんを誘うガイドブックである。

第I部（第1～6章）では、言葉の世界を言語の単位（音、単語、文など）ごとに分けて紹介している。世界各地を地理的にアジア、アフリカ、などと分割して概観するようなものだろうか。第I部各章の前半は、その章で取り上げる言語単位について誰もが知っておくべき基礎事項を解説している。旅行ガイドブックでいえば、文化や気候、通貨、食事、主な見どころなどについての説明にあたる。第5章を除く各章の後半では、その言語単位についての具体的な研究事例が2例ずつ紹介してある。すでにその地域を旅した人の旅行記を読むような気分で楽しんでいただきたい。研究事例には、交通手段や宿泊施設（研究手法や統計分析）についての紹介とともに、「ボストンに行ったら、もちろんクラムチャウダーとロブスターは外せないけど、小さな中華料理店のホット・アンド・サワー・スープもぜひ試してほしい」といった通好みの情報（興味深い

言語現象など)も盛り込まれている。

第Ⅱ部(第7～12章)では、言葉の世界を運用の観点から分類し、解説している。美術館巡りやトレッキング、ビーチ・リゾートなど、目的別旅行先の分類に相当するであろうか。第Ⅱ部の各章も、前半で基礎知識を身に付け、後半でより実践的な事例に触れられるような構成になっている。

本物の旅で行きたいところに行き、やりたいことをやるには交通手段や宿泊施設の選択が重要である。言葉の世界の旅(=言語の科学的研究)においては、調査・実験や統計解析の手法の選択がこれにあたる。言語について何かを検証したいと思った場合、それが検証できる統計分析の手法を選択することが非常に重要である。また、特定の統計分析手法を使うには、調査や実験で得られたデータがその分析手法を適用するための前提条件を満たしていなければならない。換言すれば、使いたい統計分析手法を使えるようなデータを提供してくれる調査・実験の方法やデザインを、あらかじめ選択しておかなければならないということである。言葉の世界の旅を楽しく、かつ実りあるものにするためには、統計分析に関する知識が必要不可欠なのだ。よって、第Ⅰ部と第Ⅱ部の第5章を除く各章の後半では、どのようなことを知りたいときにどのような統計手法を使うとよいのかが例示されている。

第Ⅲ部(第13～17章)では、言語の研究で有用な統計手法や統計ソフト、ならびにその使い方について、予備知識のない人にもわかりやすいように平易に系統立てて解説してある。本書が一般の言語学入門書と最も異なる点は、この「統計(ソフト)の使い方」の説明に重きを置いているところである。すなわち、ボストンは地ビールのサミュエル・アダムスを飲みながら野球観戦ができて楽しいよと伝えるだけでなく、ボストンの球場(フェンウェイ・パーク)にたどり着くためにはバスよりも地下鉄が便利であることや、球場でサミュエル・アダムスを買うためにはパスポートの提示が必要であることなどを、きちんと説明している。なお、本書で紹介しているのは、あくまで「統計(ソフト)の使い方(交通手段の選択方法、乗り方など)であり、各統計手法の数学的裏付け(地下鉄の原理、設計など)ではないので注意されたい。後者について学びたい方には、本書とあわせて、本シリーズ第1巻『数理統計学の基礎』(尾畑, 2014)をお読みいただきたい。

また第Ⅲ部は、第Ⅰ部や第Ⅱ部と独立して読んでもわかるように書かれている。したがって、第Ⅰ部や第Ⅱ部を読みながら並行して第Ⅲ部を参照するとか、あるいは第Ⅲ部の指示に従って先に統計ソフトの使い方を練習してから第Ⅰ部や第Ⅱ部に取り組むといった利用の仕方でも可能である。また、第Ⅰ部と第Ⅱ部の各章は、どの順番で読んでも構わない。ただし、第6章「音韻論」を理解するためには最低限の音声学の予備知識が必要不可欠なので、音声学になじみのない方は第6章の前に第5章「音声学」を読むことをおすすめする。

なお、第5章を除く各章末には、練習問題とさらに学びたい人のための文献案内がついている。練習問題は、本文を読んでいればすぐに答えられる易しいものから、他の文献にあたり統計分析などの作業をしたりしなければならぬやや高度なものまで、さまざまな種類のものが用意されている。自分の答案ができたなら、巻末の「解答の手引き」でチェックしてみよう。

以上のように、本書はこれから言語学の勉強や研究を始めようという人（たとえば大学の学部生）や、言語学を始めてから日が浅いという人（大学院修士課程の院生など）に、研究計画を立てて楽しめるようになってもらうことを念頭に書かれた入門書である。言葉の世界の旅行クラブに新規入会したつもりでページをめくってほしい。言語学や統計の予備知識が少しでもある「経験者」なら、さらに多くの楽しみを本書から引き出すことができるだろう。

「実際に旅行に行かないなら、計画だけ立ててもつまらない」という人もいるかもしれない。実は私も小学生の頃にはそう考えて、旅行クラブには入らなかった。しかし、大人になって実際に世界各地を旅してみてもわかったことは、「旅行は出発前にわくわくして計画を立てているときが一番楽しい（かも）」ということである。いざ出発すると、現地の空港に荷物が届かなかったり、時差ボケに苦しんだり、スリに財布をとられそうになったりと、結構大変なことが多い。もちろん最終的にはそれらのことも含めてさまざまな経験がプライスレスな思い出になるのだが、計画段階はその重要な一部である。さらに、実際の旅行にはそんなに頻繁に行けないが、計画はいくらでも立てて楽しむことができる。ぜひ、皆さんにも想像の翼を思いっきり広げて言葉の世界の旅行計画を堪能してほしい。そして、これはと思う計画ができたときには、ぜひ実行に移してもらいたい。

残念ながら、本書を読むだけで実施できる調査・実験の種類は限られている。旅行の初心者がそうするように、研究の初心者も最初は経験者やガイドの助けを借りるとよい。周囲にそういう頼れる存在が見あたらないという人は、本書の執筆者に連絡をとってみてはどうだろうか。誰か近くの人を紹介してくれるかもしれないし、あるいはその人自身が旅への同伴を申し出てくれるかもしれない。

なお、本書の各章は下記の執筆者（ガイド）が草稿を書き、編者の小泉が各執筆者の個性を尊重しつつ表現や体裁の統一を試みた。アジアのガイドはやたら屋台の食事にこだわるけれど、オーストラリアのガイドはダイビングが好きそうだなあ、などといった、各ガイドの持ち味の違いも楽しんでみてほしい。

- |         |  |
|---------|--|
| 第1章     | 中谷健太郎（甲南大学）                                      |
| 第2章     | 小野 創（津田塾大学）                                      |
| 第3・4章   | 八代和子（ドイツ ZAS 言語研究所）・Uli Sauerland（ドイツ ZAS 言語研究所） |
| 第5・6章   | 那須川訓也（東北学院大学）                                    |
| 第7章     | 酒井 弘（早稲田大学）                                      |
| 第8章     | 玉岡賀津雄（名古屋大学）・小泉政利（東北大学）                          |
| 第9章     | 杉崎鉦司（三重大学）                                       |
| 第10章    | 遊佐典昭（宮城学院女子大学）                                   |
| 第11章    | 萩原裕子（首都大学東京）・秦 政寛（首都大学東京）                        |
| 第12章    | 後藤 斉（東北大学）                                       |
| 第13～17章 | 金 情浩（京都女子大学）                                     |

#### 教員の方へ（授業プランの参考）

本書は学生が自習できるように書かれているが、大学等の授業の教科書として使われることも念頭に企画された。

学部1～2年生向けに通年で開講される「言語学入門」あるいはそれに類する授業では、前期に第Ⅰ部、後期に第Ⅱ部を、各章2週（90分の授業を2コマ）ずつかけてカバーすれば、教室で学生が練習問題に取り組む時間もとれて、ちょ

うどよい分量になっている。その場合、第Ⅲ部の内容は、各大学・授業の事情にあわせて教員が適宜、取捨選択して紹介することになる。

「言語学入門」履修済みの学部3～4年生を対象とした1学期15週の授業の場合には、第Ⅰ部と第Ⅱ部を自習用にして、第Ⅲ部の内容を実際にパソコンを使って演習形式で学ばせるという方法が考えられる。通年30週の授業であれば、後期には履修者各自の興味にあわせて実際に研究計画を立て、それを実施し、統計解析を行い、レポートを書く、というところまでもっていけるかもしれない。

大学院レベルの言語学概論の授業では、学部で言語学を専攻した学生だけでなく、心理学など関連分野出身の学生、また学部で日本語・日本文化を学んできた（言語学の基礎知識のない）海外からの留学生など、多様な背景をもった履修生が混在していることが多い。そのような場合は、前期に第Ⅰ部と第Ⅱ部の各章を週に1章ずつのペースで講義し、後期に第Ⅲ部を演習形式で学ばせるというプランにすると、さまざまなニーズに応えることができるであろう。

最後に、本書の執筆を勧めてくださった編集委員の諸先生方ならびに原稿の提出が予定よりも大幅に遅れたにもかかわらず辛抱強く待ってくださった共立出版編集部の中内千尋氏に謝意を表します。原稿に目を通し数々の有益なコメントを下された木山幸子氏と編集委員の先生方にも御礼を申し上げます。第11章の著者のおひとりである萩原裕子先生は、ご病気のため本書の完成を待たずに旅立たれました。ご遺稿の出版を許可して下さったご遺族の方々に感謝申し上げますとともに、萩原先生のご冥福をお祈りいたします。なお、本書にはJSPS科研費22222001と15H02603による研究の成果の一部が反映されています。

2015年8月

台湾花蓮縣秀林鄉景美村にて実験の合間に 小泉政利